様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月２８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９５２０２１４
研究課題名（和文）　タンホイザー伝説と近・現代ドイツ文学

研究課題名（英文）　Tannhauser Legend and Modern German Literature

研究代表者
奥田　敏広（OKUDA　TOSHIHIRO）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：６０１９４４９５

研究代表者の専門分野：ドイツ文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ系文学
キーワード：聖人伝説、近代の愛

１．研究計画の概要

伝説が、それを生み出した文化にとってきわめて重要なものであることは当然であるが、近代欧米を代表する芸術家リヒャルト・ヴァーグナーの作品も多く伝説に基づいているのは周知の事実である。しかし一方、精神分析やアドルノらの批判的批評を受け継ぎ、ヴァーグナーの芸術は伝説を批判的に分析し解体しようとするものだとする解釈が、現代ではどちらかと言うと主流となっている。

そういう中で、両者の統合、すなわち、伝説の単なる継承でもなければ解体でもなく、近代において伝説の何が解体され、何が受け継がれ、そして何が付け加えられたのかという変容を明らかにすることが本研究の目的である。

２．研究の進捗状況

上記のような目的に沿って、今までの本研究においては、抽象的な理論に終始するのではなく、タンホイザー伝説に関連する聖エリーザベト伝説なども含め、個々の伝説の具体的内容を最新の先行研究を踏まえて詳しく利用しつつ、また他方ではヴァーグナーのみならず、フランツ・リスト、ゴットフリート・ケラー、クリスティアン・アンデルセンらの作品における伝説も取りあげ、広く欧米近代芸術一般における伝説の意味を問題にしてきた。

また、パトリス・シェローの『ニーベルングの指環』の演出以来、現代の演出は、ますます大胆かつ先鋭に、基になった伝説を解体し分析するのに余念がないが、そのような演出の解釈を、本研究においてはどちらかと言うと批判的に、いわば反面教師として活用してきた。

その結果として、ドイツの近・現代文学に置いて、伝説を過去の遺物として見るのではなく、近代から現代にかけての芸術創造において不可欠で根源的な源泉になっていること、しかもそれは、反動的な意味でないのはもちろん、根源的・原初的なものの何らかの復権や復興を志向したものでもなく、まさに近代のために、近代にふさわ

しい形での源泉になっていることを明らかにした。たとえば、かつての英雄伝説を引き継ぎつつ、その「愛」というテーマを強調し、拡大することによって、ヴァーグナーの『ニーベルングの指環』は、いわば換骨奪胎され、そこでテーマとされた「愛」は、因習や宗教から解放され、自由と光輝に満ちた官能的で肯定的な「近代の愛」を、批判と称賛を込めつつ多様な形で表現していることを明らかにした。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
（理由）

中性伝説が、パロディーや批判の対象としてではなく、近代文学にとって不可欠の要素であり、その官能的な欲望のシステムという表層の根幹にある超越的なものを示唆するものとしてきわめて重要であることを明らかにするのが、本研究の目的であるが、その目的は、ヴァーグナーに関して達成されているものの、それ以外の近・現代ドイツ文学全体についてはまだ不十分であるから。

４．今後の研究の推進方策

ヴァーグナー以外の近代の作家、たとえばゴットフリート・ケラーなどの作家と中世伝説の関係に対象を広げて、さらに考察を進めていく。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 奥田敏広、英雄伝説と近代の愛―ヴァーグナーの「指環」四部作、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会「ドイツ文学研究」55 号、1－36 頁、2010 年、査読無。
URI:http://hdl.handle.net/2433/10840

② 奥田敏広、アンデルセン童話における自伝性と伝説、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会「ドイツ文学研究」54 号、1－29 頁、2009 年、査読無。
URI:http://hdl.handle.net/2433/71162

③ 奥田敏広、ある聖人伝説の変容―聖エリーザベトをめぐるリストとヴァーグナー、「希土」第 33 号、1－26 頁、2008 年、査読有。